川崎支部支部長　山岸一雄　（執筆：河合・山岸））

**川崎支部便り　第50号　（2022年3月）**
**オープンで各自が主役：川崎支部**

人生を豊かに（雑学のすすめ）

　努力は運も支配する

「努力は運も支配するという信念で厳しい練習をしてきた。」これは東京都市大学共通教育部主任教授の渡辺一郎氏（1957年東京都生まれ。筑波大学ではラグビー選手として活躍。公益財団法人日本ラグビーフットボール協会理事）は、普段の練習での努力が運を引き寄せてくると信じ、研究も練習も手を抜くなと言い続けてきました。実は毎日包丁を握らないとストレスが溜るほどの料理好きです。定番メニューは激辛麻婆豆腐と2日間煮込んだもつ煮込み、鍋です。

指導者時代に経験した英国留学では、「練習はやみくもにするのではなく豊富な経験とデータが必要、伝統を守りつつ、時代にあった変革も大切」と考える様になりました。2019年は世界の3大スポーツ大会の一つと言われているラグビーワールドカップがヨーロッパなどのラグビー伝統国以外で、しかもアジアで初開催をします。ラグビー観戦の秘訣は、「静寂の緩急なんです。試合中の観客席が息をのむ静寂とその後に来る歓喜。スクラムの駆け引きや相手ボールを奪うターンオーバー等、ルールに詳しくなくても、実際に試合を見てタックルの迫力などをじかに感じてほしい。

（写真：Yahoo Japan）

川 崎 点 描 ： 川崎支部活動拠点

　【「忠臣蔵・赤穂事件」と「縁（ゆかり）」がある川崎市⑨】

（吉良邸討ち入り前、最後の打合せ―深川会議）　　　　　　　　　　　　　　　　　　（元禄15年11月29日）

大石内蔵助は頼母子講（たのもしこう）（＊註１）の集まりと称して、深川八幡（現在の富岡八幡宮）前の大茶屋に集まり、討入り当日の詳細を決めた深川会議を行いました。最初の情報では、12月５日は吉良上野介が在宅していることから、討入りを12月6日と予定していたため、最後の打合せで12月2日に集合させたと思われますが、情報の変更があったのでしょう。

（決定事項）

　①吉良邸への討入り日は1702年（元禄15年）の旧暦12月14日に決定。この日は吉良が茶会を開くため、確実に在宅している事が確認出来ました。茶会の情報を入手したのは、大石内蔵助の一族である大石三平（＊註２）でした。大石三平は茶人、山田宗徧（江戸時代前期の茶人、宗徧（そうへん）流茶道を興した）の弟子でした（同じ弟子として、討ち入りに参加した大高源吾や吉良側で戦った清水一角もそうでした・宋徧流関係者からの情報）。大石三平と萱野三平は京橋の材木屋、中島五朗作の所に借宅して、歌道を教えていた羽倉斎（はぐらいつき・国学者で瑶泉院の歌の師匠でもあり、萱野（かやの）三平は羽倉斎とは乳兄弟（ちきょうだい）でもあり、吉良邸の絵図面を入手して萱野に渡した人物でもある）より14日の茶会日の茶会開催の情報を提供されていました。また、山田宗徧の弟子の一人であった大高源五も14日の茶会の情報を掴んでいたと言われていますが、これは歌人として人気の高かった大高に活躍の場を与えるための話ではないかと、歴史学者間では俗説とされていますが、「江赤見聞記」（明治20年に出され、大石良雄等の復讐の顛末を記録している）には記されているので、情報入手の一人として否定出来ない様です（前記に宗徧の関係者からの弟子の一人である事の説明有り）。以上から、吉良邸討ち入り日は、「12月14日」に決まりました。

（討入り注意事項―「人々心覚（ひとびとこころのおぼえ）」）　　　　　　　　　　　　　　　　　　　深川会議では同士達に「人々心覚」が示されました。これは討入りの集合場所、吉良上野介の首の

処理、引上げの方法等、16条になる討入りについての詳細な決め事でした。

　大石は、浅野大学による浅野家再興を目指していましたが、元禄15年7月18日に、大学閉門、本家広島藩浅野家に引取られる決定が幕府よりあり、夢が絶たれました。そして、7月28日の京都で行われた円山会議で吉良邸討ち入りに頭を切り替え、熟慮作成したのが「人々心覚」だったと思います。

（人々心覚の内容）

①日が決まったら予（かね）て定めた3か所に集合する。

　・堀部安兵衛の借宅･･･本所林町5丁目

　・杉野十平次の借宅･･･本所徳右衛門町1丁目

　・前原伊助の借宅･･･本所相生町2丁目

②最後に安兵衛借宅に集結すると決まる（後に変更された）。

③予て定めた時刻に出発。

④吉良上野介の首を取った者が上野介の上着に包み、泉岳寺に持参。

⑤幕府からの検分が有った場合には、「上野介の首は泉岳寺の墓に供えたい」と言う。それが認められなければ仕方が無いが、「お歴々の首は討ち捨てがたい。お指図次第で吉良家に返しても良いが、泉岳寺の墓所にお供えしたい」と言う。

⑥吉良義周（よしちか）（＊註3）の首を取った時には、持参する必要はなく、屋敷に置いておく。

⑦負傷者は肩にかけて、引取れるものは引き取り、引き取りが難しいほどの重傷者は首を切る

⑧上野介父子の首を取ったら合図の笛を吹く。

⑨鉦（かね）の合図は全員が引き上げる時に使用する。

⑩引き上げる場所は回向院とする。ここが駄目な時は、両国橋東詰め広場とする。

⑪引き上げの途中、押しとどめる者がいたら事情を告げる。「無縁寺（回向院の寺号）に引き上げ、公儀に趣旨を申し上げるつもりであるので、寺までついてきて見てもらっても良い。一人も逃げる者はいない」と言う。

⑫吉良邸から追手が有れば、踏み止まって戦う。

⑬吉良上野介の首を取る前に、幕府役人が来たら、潜戸（くぐりど）から一人だけ外へ出て挨拶をし、「只今、敵を討ち止めている。生き残った者を呼び集め、命令に従うのでしばらく待って頂きたい」と言って門は開けない。

⑭門内に是非入りたいと言われても、「討ち入った者たちは方々で戦っているので、今門内に入られても、万一のことが有るかもしれないので、追っ付け門を開いてお目にかける」と言って門を開けない。

⑮引上げ出口は裏門とする。

⑯討入りは必死の覚悟で行うものである。

**（作家半藤一利氏の反論－義とはヒューマニズムか）**

　2021年1月21日に逝去した「文藝春秋」編集長、取締役を歴任して作家になった半藤一利氏が吉良討入りの赤穂義士に反論しています。半藤氏の著書「墨子よみがえる」をお読みになった方もいるともいます。「葉隠」の作者山本常朝が激しく論難しています。第一点は、大石内蔵助以下の面々は何故本懐を遂げた後泉岳寺でさっさと腹を切らなかったのか。あわよくば名を挙げて再出仕を願ったのではないか、不純な心境が有ったのではないか、と疑っています。問題は第二点です。「主を討たせて、敵を討つこと延々（のびのび）なり」、これすなわち敵討ちの成功を期した、うまく事を成就したいところからきているのだろう。「死ぬ事と見付けたり」の武士らしくない、と「葉隠」はこれを許さないのです。君臣の義の為に、「敵討ちをしよう」という純粋な動機よりも、時間をかけて敵を油断させて「敵討ちをとにかく成功させよう」という結果のほうを重んじているのです。後の人々から義士と褒められていますが、赤穂浪士は明らかに功利主義、つまり策謀的と強く非難しています。

　「葉隠」では、47士の「義」はあくまでも徒党を組んだ自分たちだけの為で、何とかして成功させようという慮（おもんばか）りだけの偽りの義であった。荻生徂徠は、「浅野長矩（ながのり）の刃傷はもちろん、これは要するに死闘でしかない。そして討入りは不逞の浪人どもの暴挙である」と結論図づけています。

　江戸の泰平下にあって仇討ちは、親の敵（かたき）を子が、兄姉の敵を弟妹が討つことは許されています。しかし、親がこの敵を討ったり、兄が弟の敵を討ったりすることは道理に反すると許されませんでした。逆縁の敵討ちが許されるのは、最適格な肉親がいない時に限られていました。

　ですから、浅野長矩に子がないから、弟の浅野大学が敵討ちをしなければなりません。その大学の敵討ちの助太刀ならわかりますが、大石内蔵助たち家来が大学に代わって敵討ちをするのは許されません。

47士突入の際の「口上書」には、「君父の讎（あだ）は共に天を戴くべからざるの儀、黙止（もだ）し難く、･･････」と、苦しいこじつけの様です。

　事件から長い時代が過ぎ、大石内蔵助以下４７士達に対しての考え方や行動に反対論も有ることも受け止めて行かなくてはならないのかもしれません。しかし仮に現代社会において多くの社員を抱えた企業が社長の死亡で、会社をやめるでしょうか、No.2の立場の人間は何とか、経営を続けて行く努力はするのではないでしょうか。大石は会社継続を考えていた副社長の様な立場だったと思います。

中には退職金をもらい、他の会社に再就職する人も居るでしょう。この赤穂事件・忠臣蔵の最近の新しい考かたの中に、松の大廊下の刃傷沙汰以降に幕府が、裏で吉良上野介を排除するため、大石達を利用したのではないかとの考え方も出てきています。更に2022年の1月の朝日新聞の記事に、神戸大学名誉教授の野口武彦氏の「花の忠臣蔵」（講談社）や日本の歴史ものの書籍が中国で大ヒットして相当の部数が売れているそうです。日本も弥生時代の１世紀の中頃（西暦５７年以降）～7世紀の初頭（西暦６３０年頃）には、中国に多くの遣使（後漢・百済・隋・唐など）を送り、日本の建国の手本にさせてもらいましたが、今は逆に日本をより深く知りたく、古くからの日本独自の考え方、思い、人情、行動、人と人とのつながりや上下関係の在り方、等々を深く理解をし、中国人に無い日本人の在り方に、深く感銘を受けた中国人が多くなってきたのではないかと思います。しかし、「日中友好」とは「異を残して無理やりに同を求める」（求同存異）という強引な手法での友好の構築の様です。その場合の「同」とは、「中国と無条件に仲良くしなさい」の意味だそうです。

皆様はどの様に思いますか。次回以降の【「忠臣蔵・赤穂事件」と「縁（ゆかり）」がある川崎市】を楽しみにして下さい。

（＊註１）たのもしこう・グループのメンバーが定期的に一定の額のお金を積み立てて、貯まったお金をメンバーに融通する互助的な組織。鎌倉時代に信仰集団の講から発生した。無尽（むじん）とも言う。

（＊註２）内蔵助の縁戚で、討ち入りに加わった大石瀬左衛門の従兄弟になり、三平の父大石無人は赤穂藩ではなく、他藩の藩士で、討ち入りには当然参加しておらず、内蔵助を陰でバックアップをしたと伝えられている。

（＊註3）（吉良上野介義央の長男で米沢藩第四代藩主として上杉家に養子に出した上杉綱憲の子供を上杉家から、吉良家に吉良上野介のあととりとして養子に入った者で吉良上野介にとっては孫になる。

支部の活動

①　2021年11月20日（土）に「ミステリーツアー」を開始し、母校の歴史（第一校舎・第二校舎）、隈研吾を追体験しました。

　動画を川崎支部のホームページに掲載しています。（動画15分間）

②　2022年1月22日（土）は夢キャンパスで、定例講演会を開催し、「日本人の1％しか知らない幻の奥沢線」（経営工学OB　染野代表）が好評です。　前日からのまん延防止法により、ZOOM講演会になりました。

③　2022.03.19（土）か26（土）にお花見を予定。

 ご存じですか

日本の地域資産（温泉）

905年（延喜5年）に奏上された「古今和歌集」（奏覧後に内容に手を加えた跡があるので912年（延喜12年）の説もある）を見ると、詞書（ことばがき）に「但馬（たじま）国の湯」の文字が有るので、志賀直哉で有名な城崎（きのさき）温泉（兵庫）と見られています。源氏物語にも道後温泉が登場します。

武田信玄等の戦国武将は領地内の温泉地を確保し、リハビリセンターとしていたことはよく知られています。1582年（天正10年）に京都の山崎の戦いで明智光秀を破り、1583年（天正11年）に賤ヶ岳の戦い（しずがたけのたたかい）で勝利してから豊臣秀吉の有馬温泉通いが始まります。丸腰で温泉に入ることは、平和の時が在ったことです。また、徳川家康は江戸幕府を開いた翌年（1604年）には、熱海温泉（静岡県）に7日間逗留した記録が残されています。徳川家康は熱海の湯を樽に詰めて、各地の大名に贈ったそうです。4代将軍家綱は、新しい檜の樽を用意させ、紋付き袴の係りが、長柄杓（ながびしゃく）で熱海の大湯の源泉を汲み入れました。封をされた湯樽は「御汲湯（おくみゆ）」と呼ばれ、昼夜を分かたず江戸城に運ばれました。江戸時代には各地の温泉を紹介した「旅行用心集」（1810年）には、諸国温泉292か所が紹介され、「温泉番付」も登場しました。

長野県の野沢温泉を好む墨客（ぼっかく）は多く、代表的なのは芸術家の岡本太郎で、毎年の様に訪れたので、野沢温泉村の名誉村民になりました。太郎の母である岡本かの子（本名は岡本カノ）の文学碑は、川崎市高津区の二子神社（高津区二子一丁目－田園都市線の二子新地駅下車徒歩3分）にあります。境内には揺らぐ炎のような白い「夢幻の白鳥」が迎えてくれます。全国の愛慕者によって1962年11月に建てられ、彫刻の台座には「この誇りを亡き一平とともにかの子に捧ぐ　太郎」という制作者で長男の岡本太郎の銘が刻まれ、その横に「としとしにわが悲しみは深くしていよよ華やぐいのちなりけり」という歌が、かの子の筆跡から拾字されて御影石に刻まれています。是非ご覧下さい。

（写真：Yahoo Japan）

皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。（連絡先：k\_yamagishi@hexel.co.jp 山岸宛）